令和５年１１月６日（月）

「この気持ち分かる」は読書から

小説「火花」で芥川賞を獲得したピースの又吉直樹さんは、中学生の頃から太宰治や芥川龍之介をよく読んでいたといいます。
「夜を乗り越える」という本の中で、又吉さんは太宰治の「人間失格」を読んだときのことを、こんな風に語っています。
「この主人公、めっちゃ頭の中でしゃべっている。俺と一緒ぐらいしゃべっている」
自分の気持ちは誰にも分かってもらえません、こんな風に悩んでいるのは自分だけなんだろうな、と思っていたときに太宰治の「人間失格」と出会って、自分と同じように悩んだり考えたりしている人がいるんだ、と知ったわけです。
「ああ、この感覚、自分にもある」「わかる、わかる」と思える。共感できる。本と対話するということは、そういうことです。
「本に出会い、近代文学に出会い、自分と同じ悩みを持つ人間がいることを知りました。それは本当に大きなことでした。本を読むこと、本と話すことによって、僕はようやく他人と、そして自分との付き合い方を知っていったような気がします」
と又吉さんは書いています。
人間関係がうまくいかないとか、自分はこれでいいんだろうかと悩みを抱えているとき、つながっている人たちがいるのはとても心強いものです。
悩みが解消されるわけではなくても、気持ちをやわらげることができます。「自分は一人じゃない」と思えるようになった本は、皆さんの生涯の友達になることでしょう。